

Dhādekī-Sālhāpūr の Brahmin と被差別 caste

—北インド農村の社会と生活 (VIII)*—

Brahmin and Scheduled Castes in Dhādekī-Sālhāpūr—

A north Indian village (VIII)

佐々木 明

北インド最大の被差別 jāti である Chamār は北インドの他のいかなる jāti よりも人口が多いので、特にその差別の要因を考察する研究が多い。調査報告例は儀礼的不可触性の概念そのものに懐疑的である (Pradhan, 1966 : p.48)。牛・水牛の皮はぎを職業とすることに原因を求めるのは一見説得的だが、各種の家畜の解体のうち、Chamār の一部だけ (Lewis and Barnouw, 1956 : p. 18) が行っていた牛の解体の不浄性のみが強調されるのは理解しがたい¹⁾。各地からの報告は Chamār の皮はぎ業の収入にしめる割り合いが小さく、農業労働を主体とする雑多な労働をしていたとみる点で一致し (Gulati, 1970 : p. 178, Lewis, 1956 : p. 74, Mencher, 1974 : p. 472, Nath, V., 1965 : p. 681, Srivastva, 1973 : p. 50), 全牛・水牛の自然死を仮定した単純計算結果と矛盾しない²⁾。各種の定量的報告を総合すると、皮革生産が重要だった世帯は全体の5%以下³⁾、刈り分け小作が重要だった世帯が10—20%、その他⁴⁾が80%強とみつめられる。皮革生産世帯・刈り分け小作世帯が支配 jāti の農業経営に労働者として雇用されることはあっても、定義および現状では逆に農業労働者世帯が皮革生産・刈り分け小作に従事することはありえないので、厳密を期しがたいが、たとえば少なめにみつっても90%以上の Chamār 世帯では農業労働及びそれに準ずる労働による収入が90%以上をしめていたとみることもできるだろう。

1970年代半ばの民族誌的調査では既に把握しにくくなっていた zamindar abolition 以前の Chamār の収入源は以下のとおりで、上記の推論を裏づける (Lewis, 1956 : p. 74, Pradhan, 1966 : p. 46, Srivastava, 1973 : p. 49)。

- (i) 収穫期労働⁵⁾
- (ii) 非収穫期労働：二食以外無給 (begār)⁶⁾
- (iii) bataī (こうしの受託飼養)：支配 jāti の(水)牛の生んだ子を4～5年間あずかって育てる。支配 jāti が作物を収穫した後の畑から飼料を採取する。売却時に利益折半⁷⁾。
- (iv) 皮はぎ：前述⁸⁾
- (v) 脱穀場の牛糞中の小麦粒

Chamār 世帯の安定的収入の中心は特に rabi 収穫労働への支払いにあり、半年分弱の食糧を確保できた (佐々木, 1985 : p. 15)。Kharif の収穫労働もある程度あり、さらに(ii)の非収穫期労働で年間必要食糧の20%程度を入手できたから、(i)・(ii)を併せると同70%前後

* (『信州大学人文科学論集』第22号25頁よりつづく)

を確保できたとみられる。必要食糧の不足分は、Chamār にとっては多額だが不定期的な (iii)、過大には評価できない (iv)、差別補強効果が経済効果よりも大きそう (v) よりは、むしろ家族全員が雑多な短期雇用に断絶的に従事することによって入手したと考えるべきだろう。それでも生活が困難ならば、自ら差別的な行動をとってもその村にいつづけるようにするか、または労働力の不足していそうな村に運命に身を委ねて移住するしかなかった (Cohn, 1961 : p. 1057) のだろう⁹⁾。労働力不足の zamindār はその必要性に応じた一時的食糧供与・住居・零細耕地貸出条件をつけて、必要な労働力にみあう Chamār を自村に誘致し、差別的身分関係を設定した (Cohn, 1960 : p. 245, 1961 : p. 1055)¹⁰⁾ から、北インド農村人口の少なからぬ部分に相当する Chamār は長期的には不断の流動状態にあったと考えざるをえない。

以上から明らかなように、実質的には「専業」農業労働者である Chamār が最低限の生活水準を維持するかまたは時にはこの水準をやや下廻るレベルに彼等の賃金を調節して、低賃金の大量労働力を確保することが、北インドの前近代農業経営には不可欠の条件だった。Chamār の年間収入の約半分が支払われる rabi 収穫期の賃金は労働力不足から急上昇して調節できないので、一年の大半をしめる農閑期の低賃金によりこの目的を達成するのが普通だった。長い農閑期に、次の rabi 収穫期まで生存できる量の現物賃金のストックがあれば、働かずに安静にしてカロリー消費をおさえた方が合理的であると Chamār 自身が判断する (Etienne, 1968 : p. 96) 極端な低賃金状態が出現した。Rabi 収穫期が近づくにつれて、食糧不足が激しくなると、ストックの残りのなくなった Chamār から次々に少ない雇用により低賃金で雇用されるので労働条件はますます悪化するから、rabi 収穫期直前の冬期 (12・1月) には、扉のない寒い部屋で空腹をかかえながらワラをしいて一日をすごしがちだった。冬期の栄養不良は特に呼吸器系の急性疾患による (乳幼児の) 死亡率を異常に高くした (Hopper, 1955 : p. 149) から、伝統的な生活水準で Chamār が 'caste' として再生産しようとする状態が一般的に出現したかどうかはやや疑わしい。

Chamār は居住歴からも 'caste' の系譜的完結性の面からも流動的な population であり、特定の 'caste 職業' に対応する 'caste' であることには疑問をもたざるをえない。ある時点のある村で、支配 jāti の設定した差別的身分関係にとりこまれた人々が、その時点のその村の Chamār である、と考える以上の定義を想定するのは適当ではないだろう¹¹⁾。この項の結論として、農村居住者の無視できない一部を農業労働者として生存可能な限界的状态におきながら、わずかな不足分を補うのに Chamār の「自発的」で被差別的行動が必要な状況を現出させることによって、副次的に 'caste 差別' を維持し、最終的には安価な農業労働力を確保するのが、Chamār 差別のポイントだったとして大過ないだろう¹²⁾。

筆者は Chamār が状況によりとらざるをえない被差別行動のうち、最も重要だったのは性的差別であったと考える¹³⁾。Chamār への性的差別をとりあげた調査報告は一例しかない。Pradhan は支配 jāti (Jāt) と Chamār の主要な関係として、Jāt の家に入出入りする riyayā の Chamār の女性と Jāt 男性との間の非公式・強制的な性関係をあげ (Pradhan, 1966 : p. 104), Chamār が安定的生活をつづける上で、被差別的性関係が重要だったことを示唆した。性関係を筆者が重要視するのは、jāti 名 'Chamār' がこの性関係と具体的に関連している可能性があるからでもある¹⁴⁾。

Bhangī の各世帯の一人以上の成人女性が uplā をつくる。Bhangī は「掃除人 caste」とされるが、uplā が重要な燃料である (佐々木, 1984 : p. 22) ことを考えれば、「燃料作成 caste」とするのが正しいのだろう¹⁵⁾。Uplā をつくる目的で Jāt の ghēr におちている(水)牛の糞をあつめるのは、結果的に ghēr を掃除することになるが、Jāt の ghēr 以外ではこの作業をしないから、「掃除人 caste」とみるのは妥当でないだろう。Bhangī の各世帯は1日に7-8の Jāt の ghēr で uplā をつくり、3-4日で受け持ちの ghēr をひと回りする¹⁶⁾。Bhangī の成人女性が一頭の牛の糞からつくる uplā に対して、Jāt は年間 20kg (rabi・kharif 各10kg) の穀物を支払う。

豚飼いは Bhangī 女性のもう一つの仕事である。村内で豚を飼うのは Bhangī だけで、居住区の一画に豚舎があり、午後には池のまわりなどに落ちている人糞を放豚させてたばせる。豚肉は祭礼時に Chamār・Bhangī が食べる。

男性の伝統的経済活動として確認できたのは Kacchā makān の建設のみである¹⁷⁾。

Bhangī の伝統的収入源は以下の通りである (Lewis and Barnouw, 1956 : p. 72, Pradhan, 1966 : p. 46, Sharma, H. P., 1971 : p. 167)。

- (i) 収穫期労働 : Chamār よりはやや少ない¹⁸⁾。
- (ii) 非収穫期労働 : uplā 作り (女性による)¹⁹⁾
- (iii) 鶏・豚の委託飼養²⁰⁾
- (iv) 加療行為の報酬 (後述)

(i)の収入で年間穀物必要量の半分弱を入手でき、(ii)でもほぼ等量を手に入れた²¹⁾から、収穫期の夫婦の労働と非収穫期の女性の労働で生活維持は可能だったろう。(i)・(ii)に(iii)・(iv)など²²⁾を加えれば、Chamār が余儀なくされた被差別的関係を必要とする程の貧窮状態には至らなかったと考えられる。上述の内容から考える限り、Bhangī 差別の根拠は「豚」にしか求められないだろう。しかし、豚の飼育への差別は Islam 的だから、Bhangī 差別の根拠が豚であるとするには、Hindu である Bhangī が何等かの意味で、少なくとも他の Hindu jāti よりも Islam 的である必要があるだろう。

Bhangī の Islam 的性格を積極的に物語るのは、かつて行われていた²³⁾ Bhangī の加療行為 (前述(iv))である。「大量の肉・酒・菓子を持ち上げて……熱心に仕えることにより……加療・呪術を目的として超自然的存在をコントロールする力を手に入れることができると考えられていた。…… Bhangī 固有の5神格 [Panchipīr] のうちの少なくとも一つを守護神とする他、一般的に信じられていた病気の女神 [Mātā (Durgā : 病瘡神)], 村の守護神・悪霊 [dih (佐々木, 1981a : p. 306)] なども Bhangī 各世帯での祈願の対象であった。……加療行為には Bhangī の加療者10人以上を集める必要があり、長老の加療者が指揮して、超自然的存在が直接加療にあたる Bhangī に憑依するように取りしきった」(Mahar, 1960 : p. 280筆者訳 [] 内筆者)。「Chhura [=Bhangī] たちは Islam の聖者 [pīr] を caste の神格として崇拝し、加療時の体の動かし方、祈願の方法などはおおむね Islam 風だった。…… [Arya Samaj の浸透後は] 牛肉食用・土葬などの非 Hindu 的習慣を棄て、Islam 風の [pīr の] 祀を破壊した」(ibid : p. 283同)。

Bhangī 男性による Islam 風の加療行為に注目すれば、「豚を飼う Islam 風 jāti」としての Bhangī の特殊性、それゆえの差別をより容易に理解できるだろう。筆者が Bhangī

の加療行為を重視するのは、加療者がトランス導入に用いる bhāng (大麻) とこの jāti の名称が明らかに関係しているらしいからでもある。

北インド農村の民族誌的報告には被差別 jāti (単数または複数) を Harijan と記述するものが少なくない。北インド農村の Harijan の約80%が Chamār, 残りは殆んどが Bhangī である (Pradhan, 1966 : p. 23) から、これまでの記述でも充分であるが、Harijan は北インド農村以外の地域の多様な被差別人口に対しても用いられる (Chandra, P., 1958 : p. 21) ので、以下に北インド農村の Harijan の特色を簡単に述べる。

(i) Dhādeki と同様に北インド農村の Harijan は「不可触」ではない²⁴⁾。'Untouchable' は Jāt と「一緒に作業して接触しても不浄とは考えられていない」(Sharma, K. L., 1971 : p. 1541)。

(ii) 耕作権が制限されている (Gangrade, 1975 : p. 252)。ただし、Dhādeki には耕作権のある Chamār が一世帯あり、例外は存在する²⁵⁾。耕作権を制限された農村居住者だから農業労働者以外の生計は困難である²⁶⁾。

(iii) Neolocal な慣行があり、拡大家族が形成されにくい (Mandelbaum, 1968 : p. 32)²⁷⁾。個人単位の雇用に従うので基礎家族に傾きやすい上に、住居が狭く複数の夫婦が同じ家屋に居住できないからでもある²⁸⁾。

(iv) 通過儀礼に Brahmin が参加しなかった。ただし、この事実は Harijan が「二流の Hindu 教徒」であったことを意味するのではなく²⁹⁾、上位の人間が下位の人間から現物を受けとれないとする北インド一般の身分関係によって、Harijan の儀礼に Harijan 以外の人々が参加できない結果として生じるのだらう³⁰⁾。

Harijan の大部分をしめる Chamār が北インド農村居住者の数分の1を占める最大人口の jāti であるので、北インド農村の Harijan の民族誌的記述のみによっても、Chamār の社会と生活の実態は比較的詳細に判明する。しかし、多くの記述では Harijan (Chamār) が「二流の Hindu 教徒」であること (に対する批判的見解) が主要な論点となり、農業労働者である Chamār が、好んでその中に生活しているとは信じがたい差別的状況におかれながら、近世または近現代の都市に流出できず (Gould, 1961 : p. 947)、差別的諸関係に拘束されつつ慢性的な低賃金・半失業状態で農村内に滞留しつづけてきたこと、およびこの現象が有してきた社会的、経済的機能には比較的無関心である。筆者は、北インド農村の社会構造、特に caste 制度の人類学的考察をすすめる上で、この現象とその機能の解明が最も重要であると考ええる。

『民族学研究』第45・46巻掲載の拙稿および「北インド農村の社会と生活 (I-VIII)」を副題として、当論集第15号から発表してきた一連の拙稿は本稿を最終部分とする。これらは、1974年1月から1975年1月の間の Uttar Pradesh 州 Saharanpur 県での民族誌的調査と1975年10月から1978年3月までの文献調査の結果を整理して、1978年4月から1980年9月の間に作成した原稿を諸般の事情から発表できなかったため、その前半部分をさらに2/3に短縮して、順次発表したものである。最新の参考文献がないのは上記の経過から不可避であった。今後は、北インド農村の社会構造に関する前記原稿後半部分を新しい文献の調査を加え

て書き改め、順次発表していきたい。

註

- 1) 被差別 jāti である Bhangī は不衛生な豚を飼い屠殺して解体する（佐々木, 1981 : p. 28）が、この一見して「被差別」的な行為が Bhangī の被差別的状態の主因であるとする考え方が北インド農村の住民にも北インド農村の研究者にも全くみられない一方で、自然死した牛・水牛——特に家屋内装での牛糞使用（佐々木, 1984 : p. 20）を考慮すれば、豚に比べて明らかに清潔と考えられていると判断せざるをえない——の皮をはぐことの不浄性を強調するのは非論理的だろう。非差別 jāti でも生皮取り引きをすることがある（Lewis, 1956 : p. 60）から、牛・水牛の生皮が被差別的物質であるとするのもできないだろう。
- 2) Jātī 世帯と Chamār 世帯とが zamindār—riyayā 関係にあった zamindār abolition 以前の状況では、Chamār の皮はぎによる収入が重要でありえた可能性が全くないことがこの単純計算結果から明らかだから、全 Chamār が「本来の jāti 職業」だった皮はぎに従事していた状態から、二次的に農業労働者化したとする見解（Dumont, 1970 : p. 103）は受け容れがたい。19c から 20c にかけての経済史を考慮すれば、短期的にはともかく、長期的には皮革需要が増大してきたのは確実だから、伝統的農村では逆に皮革生産の経済的重要性は相対的に小さかったとみるのが自然だろう。
- 3) 皮革生産が Chamār の特定部分に限定される（Majumdār et al., 1955 : p. 212）とするのはこの現象をさしているのだろう。
- 4) 実質的には農業労働。20c 後半には農村外収入が重要である世帯が10—20%に達した。
- 5) 佐々木, 1985 : p. 15参照。Zamindar abolition 以前には雇用形態が多少異っていた可能性があるが、収入のシェアに大差はなかったとみてよいだろう。
- 6) 農業労働を主とし、農業に関連する雑多な労働および牛・水牛に関連する多様な労働を含む。
- 7) 差別強化の機能を強調することがある（Freed & Freed, 1972 : p. 400, Nath, V., 1965 : p. 746）が、性的差別にくらべれば特に顕著ではないだろう。
- 8) Chamār が年に1—2足の皮製履物を支配 jāti に渡した例があった。
- 9) 万一多少の余裕が生じて、長期的には通過儀礼に関する出費(婚資)にあてる目的で、支配 jāti 世帯から返却不能に近い額の借金をする必要があるのが普通だったから、農業労働者である Chamār 世帯が自力で耕地を入手する状態は生じなかった。Chamār が零細耕地を支配 jāti から貸与され、自給用園地とすることもできたが、上級の jāti に生産物を手渡せないとする caste 差別により、支配 jāti に小作料を現物納入する小作関係はもてず、刈分け小作に甘じざるをえなかった。耕地を拡大して自作農の耕地規模を実現するのが農耕の有畜性から非常に困難である（佐々木, 1985 : p. 1）上に、自給用の零細耕地から出発せざるをえなかったので、Chamār 世帯が農業労働者、小作農、自作農と上昇するのは不可能だった。民族誌的報告でも Chamār の農業経営は例外的かつ零細である（Cohn, 1961 : p. 1053）。Dhādeki の耕作 Chamār は定住時の特殊な条件が現在まで残存した極めて例外的な事例であろう。
- 10) 流動的な農業労働者である Chamār「専用」の住居を特定地区に準備したことと、この地区に「専用」の井戸を準備したことが結合して、Chamār の Chamār 用井戸の使用義務、他の井戸の使用禁止の慣行が形成されたのだろう。
- 11) 支配 jāti が幼時から蔑称として 'Chamār' を用いる（Mandelbaum, 1968 : p. 29）のは、もともと 'Chamār' が被差別労働者への包括的蔑称にすぎないことを意味しているのかもしれない。
- 12) 合理的に説明できないのが差別であるから、従来の Chamār 研究が志向してきた差別の「起源」

追求は、論理的に不可能だったと考えるべきだろう。むしろ、Chamār が誘導されてとらざるをえなくなる被差別的行動により、Chamār が差別されて当然であるとの全社会的合意を形成し、その差別的低賃金を正当化するなどの機能を重要視すべきだろう。

- 13) Chamār 差別を考察する上で、Chamār が余儀なく選択する Chamār 自身の被差別的行動に注目するのは、Chamār 以外の jāti が Chamār に対して行っている差別の多くが伝統的でない (Das & Acuff, 1970 : p. 51) からである。たとえば 'Hindū教' の宗教施設への Chamār の入場を認めない「慣行」は過大に重要視されてきたが、北インド農村では人間が中に入りうる 'Hindū教' の宗教施設の建設そのものが近代的現象である (佐々木, 1981 : pp. 31-32) ので、前近代の Chamār 差別の分析の材料となりえない。しかも、近代的 'Hindū教' 施設への Chamār 入場が、当該者の食習慣・衣服等の変更のみで充分なことはこの種の差別が全く重要ではないことを暗示していると判断してよいだろう。
- 13) この差別的慣行は、zamindar abolition 以後の現在では存在しないだろう。また、zamindar abolition 以前でも外国人調査者の目には触れたことがなかったと考えられる。
- 14) Chamār の「皮はぎ」が意味するのは、Chamār 男性による家畜の皮はぎであると一般に考えられているが、割礼を施さない Hindū の支配 jāti 男性と Chamār 女性との間の性関係をさしているのかもしれない。
- 15) Uplā をつくるのは成人女性だけだから、uplā づくりを「caste 職業」とみても、Bhangī の全世界帯が「caste 職業」に従事している、とするのはやや行き過ぎだろう。
- 16) 早朝から昼までの間に Jāt の ghēr にいき牛糞をあつめ、pathwālā (佐々木, 1984 : p. 23) にもっていき午後成形する。雨期には成形しても乾燥できないので、未成形のまま積みあげておく。
- 17) 現在では、近くの町で清掃業労働に従事する (Lewis and Barnouw, 1956 : p. 72) ことが多い。
- 18) Dhādekī では Bhangī が収穫労働に参加しない (佐々木, 1985 : p. 15)。しかし、一般的には Chamār 同様の農業労働者であり、時には小作をすることもある (Sharma, H. P., 1971 : p. 166, Eglar, 1968 : p. 34)。
- 19) uplā は Jāt, Bhangī で折半。Dhādekī の支払い量はやや多目だろう。
- 20) 支配 jāti が購入資金を貸し、Bhangī が育てる bataī (cf. p. 91)。確認できなかったが、Dhādekī でも bataī で豚を飼っていたのだろう。
- 21) Bhangī—世帯に Jāt 25世帯が対応し、Jāt—世帯が 20kg 支払うとして計算した。(i)・(ii)のみで必要量の 8・9 割程度に達したと考えるのが妥当だろう。
- 22) 支配 jāti はこの他不定期 (数年に 1 回) に衣料等一揃いを Bhangī に与えることがあった。
- 23) Arya Samāj 等の近代的宗教活動が禁止したので、現在では行われぬ。ただし、月触等の御布施集め (Freed, 1964 : p. 84), 新月の日の綿糸集め (佐々木, 1984 : p. 16) などの宗教的色彩を多少残す慣行が断片的に報告されている。
- 24) 「不可触」であるなら、Chamār を Chamār たらしめている差別的性関係は成立しえない。
- 25) 全国的には全耕地の14%の耕地の耕作権が指定 caste に属し、耕作規模が非指定 caste の1/2近い (Chandidas, 1969 : p. 977) のにくらべると、例外を認めても北インド農村の Harijan の耕作権は明らかに弱い。北インド農村では耕作権を認めないのが原則らしいが、耕地に余裕のあった時代には現在よりも Harijan の耕作権を認めやすかったことは充分考えられる。
- 26) 現代では農業機械化により非農業労働力化しつつあり (Gangrade, 1975 : p. 252), 農村部の非農業労働者 (煉瓦運び等), 都市労働者化しつつある (Nath, V., 1965 : p. 745)。
- 27) Harijan には "Hindu joint family" が無い (「より Hindu 的でない」) とする観点が非拡大家族

性の強調の背景にあることが予想される。確かに、婚資型結婚・女性労働の収入寄与から生じる女性の地位の高さが拡大家族を構成しうる近親女性間の対立 (khāz) を助長する (Gangrade, 1975 : p. 258) から、拡大家族が形成されても維持は困難だろう。しかし、平均寿命が短かいので子供の結婚後比較的短期間に両親が死亡し、成人する子供の数も多くないという人口学的条件に加えて、核家族単位で村落間を移動させるをえない (Shah, A. M. ; 1974 : p. 26) 状況にあることなどの社会・経済条件が前提にあり、拡大家族を形成する蓋然性そのものがもともと小さいから、拡大家族を解体させる要因によって拡大家族の少なさを説明するのは妥当でないだろう。

- 28) Chamār でも同様の傾向が指摘されている (Cohn, 1961 : pp. 1052-1053)。
- 29) 最も重要な通過儀礼を例にとれば、伝統的な婚資型結婚では māmā (FB) が婚資を新郎側から新婦側にわたす重要な役割をはたし (Gangrade, 1975 : pp. 255-256)、近代的な持参金型結婚では多少積極的に参加することのある Brahmin は jāti によってはただ列席して、食事・現物をもらうだけだったから、Hindū の通過儀礼に Brahmin が不可欠であると考えるのが誤りであるとしても過言ではない。
- 30) Harijan への、あるいは Harijan 相互間での様々の差別 (Luschinsky, 1961 : p. 306, Mathur, 1968 : p. 261) は、時に宗教的に説明されるが、通過儀礼の Brahmin 不参加と同様に、非宗教的な身分差別の結果にすぎないように感じられる。

参 考 文 献

- Ahmad, S. 1970 "Social Stratification in a Punjab Village" *Contributions to Indian Sociology* 4 pp. 105-125
- Atal, Y. 1967 "Conceptual Framework for the Analysis of Caste" *Sociological Bulletin* 16(2) pp. 20-38
- Beidelman, T. 1959 *A Comparative Analysis of the Jajmani System* Association for Asian Studies, New York
- Chandidas, R. 1969 "How Close to Equality are Scheduled Castes?" *Economic and Political Weekly* 4(24) pp. 975-979
- Chandra, P. 1958 "Hindu Social Organization in Village Majra" *Eastern Anthropologist* 11 pp. 203-211
- Cohn, B. 1960 "The Pasts of an Indian Village" *Comparative Studies in Society and History* 3(3) pp. 241-249
- 1961 "Chamar Family in a North Indian Village : a structural contingent" *Economic Weekly* 8 pp. 1051-1055
- Dumont, L. 1970 *Homo Hierarchicus : An essay on the caste system* (transl. by Sainsbury) Univ. of Chicago Pr.
- Eglar, Z. 1960 *A Pujabi Village in Pakistan* Columbia Univ. Pr., N. Y.
- Etienne, G. 1968 *Studies in Indian Agriculture : The art of the possible* (transl. by M. Mothersole) Univ. of California Pr.
- Freed, R. S., and S. A. Freed 1964 "Calendars, Ceremonies and Festivals in a North Indian Village : Necessary calendric information for field work" *Southwestern Journal of Anthropology* 20 pp. 67-90
- 1969 "Urbanization and Family Types in a North Indian Village"

- ibid.* 25 pp.342-359
- Freed, R. S. 1970 "Caste Ranking and the Exchange of Food and Water in a North Indian Village" *Anthropological Quarterly* 43 pp.1-23
- Freed, R. S., and S. A. Freed 1972 "Cattle in a North Indian Village" *Ethnology* 11 pp. 399-408
- Gangrade, K. D. 1975 "Social Mobility in India : A study of depressed caste" *Man in India* 7(1) pp.248-272
- Ganguli, B. N. 1974 "The Indian Peasant as an Analytical Category" *Sociological Bulletin* 23(2) pp.153-168
- Gould, H. 1961 "Sanskritization and Westernization : a dynamic view" *Economic Weekly* 13 pp.945-950
- Gulati, L. 1975 "Female Work Participation : A study of inter-state differences" *Economic and Political Weekly* 10 pp.35-42
- Hopper, W. 1955 "Seasonal Labour Cycles in an Eastern Uttar Pradesh Village" *Eastern Anthropologist* 8 pp.141-150
- Kolenda, P. 1966 "Regional Differences in Indian Family Structure" in Crane, R., ed. *Regions and Regionalism in South Asian Studies* pp.147-226
- Lewis, O. 1956 "Aspects of Land Tenure and Economics in a North Indian Village" *Economic Development and Cultural Change* 4 pp. 279-302
- Lewis, O. and V. Barnouw 1956 "Caste and the Jajmani System in a North Indian Village" *Scientific Monthly* 83(2) pp. 66-81
- Luschinsky, M. 1961 "Traditional Village Culture in Modern India" *Journal of Human Relations* 4 pp.300-311
- Mahar, P. 1960 "Changing Religious Practices of an Untouchable Caste" *Economic Development and Cultural Change* 8(3) pp.279-287
- Majumdar, D. N., et al. 1955 "Inter-caste Relations in Gohanakallan-A village near Lucknow" *Eastern Anthropologist* 8 pp.191-214
- Mandelbaum, D. 1968 "Family, Jati, Village" in Singer, M., and B. Cohn ed. *Structure and Change in Indian Society* Wenner-Gren Foundation of Anthropological Research
- Mencher, J. 1974 "The Caste System Upside Down, or the Not-so-mysterious East" *Current Anthropologist* 15 pp. 469-478
- Nath, V. 1965 "The New Village" *Economic Weekly* 17 pp.679-684(I), 745-750(III)
- Pradhan, M. C. 1966 *Political System of Jat in Northern India* Oxford Univ. Pr., Bombay
- 佐々木 明 1981-a 「ダーデキー・サルハープールの宗教生活(1)」『民族学研究』45(4)pp.293-307
- 1981-b 「 " (2) 』46(1)pp.18-34
- 1982 「Dhadeki-Salhapur の家庭と家族」『(信州大学)人文科学論集』16pp.51-66
- 1984 「 " の物質文化」『 " 』18pp.15-30
- 1985 「 " の農業(1)」『 " 』19pp.11-27
- 1986 「 " (2) 』20pp.41-53
- 1987 「 " の『職業 caste』」『 " 』21pp.11-24
- Schwartzberg, J. 1968 "Caste Regions of the North Indian Plain" in Singer, M., and B. Cohn eds. *Structure and Change in Indian Society* pp.81-113

- ed. 1978*A Historical Atlas of South Asia* Univ. of Chicago Pr.
- Shah, A.M. 1974 *The Household Dimension of the Family in India* Univ. of California Pr.
- Sharma, H.P. 1971 "Caste and Occupation Mobility in a Delhi Village" *Eastern Anthropologist* 23 pp.159-179
- Sharma, K.L. 1971 "Modernization and Rural Stratification: An application at the micro level" *Economic and Political Weekly* 6 pp.1537-1543
- Srivastava, S.L. 1973 "Cultural and Social Change among the Raigars" *Man in India* 53 pp.46-58
- Wadley, S. 1976 "Brothers, Husbands and Sometimes Sons: Kinsmen in north Indian ritual" *Eastern Anthropologist* 29(2) pp.149-170

Brahmins and Scheduled Castes in Dhādeki-Sālhāpur

A north Indian village (VIII)

Akira SASAKI

Four Brahmin kin groups live in Dhādeki. They have been petty peasants and their religious activity was restricted to nominal participation at luncheds held at the rites-de-passage of Jāts. The presentation for their inactive attendance forced them to subsist on narrow fields.

Brahmin dominance as landowners, not observed in Dhādeki, is to be the result of large scale land donation by non-Brahmin zamindars, of a custom developed before or under the Mughal regime. Similarity in social structure between villages under Brahmin landownership and ones under non-Brahmin dominance is well explained by the precedence of the latter pattern. In the latter villages Brahmins are considered to be a part of *kamin* as in Dhādeki.

The population of Chamār is only next to Jāt, but consists of smaller kin groups which are, however, larger than ones among occupational castes.

Collaterally extended families are relatively frequent among Chamār because of the residence discrimination. The tendency is especially apparent among the lower group of Chamār. The upper group exhibits typical non-Jāt family composition characterized by nuclear families and households without married couple. Three groups (Brahmins, the lower and middle groups of Chamār) have an unexpected similarity in the family structure. The frequency of collaterally extended family increases among whomsoever residence extension is prescribedly restricted. The avoidance of collateral extension and inclination to vertical

extension prevail in family structure all through the Dhādekī castes.

Scheduled castes (Chamār and Bhangī) live in quarter allotted by Jāt. Cattle skin hiding, Chamār's "caste occupation", is not substantial. They are actually agricultural laborers.

Their economic activities are not responsible for their status. The under-employment forces them to accept the discriminative demands of Jāt or to immigrate to another village in time of scarcity. The sheer poverty of Chamār prevents the population from the natural maintenance. Chamār is not a self-reproducing 'caste' but a category of people who have accepted the discriminatory demands. Among the inhumane requests attention is to be focused upon compulsory sexual relation between Jāt male and Chamār female.

The "caste occupation" of Bhangī, *uplā* making, is not polluting. Another typical activity is hog raising. Sufficient income obtained by Bhangī does not necessitate humiliating behaviour. Their discriminated status is due to their contradictory pursuit of piggery and quasi-Islam practition. The caste is named after *bhang* (hemp) used as their hullucinogens.

Harijans as appear in north Indian rural ethnographies are largely Chamār who are 'touchable' agricultural laborers. The study of Chamār is to be concentrated on their arrested and discriminated underemployment.